

たきのうえ を思う

音更町在住

堀田 正晴さん



誰にでも母があるように誰にもふるさどがある。私はもの心がつくと滝上の駅前にあった豆腐屋の息子であった。豆腐屋は朝が早く夫婦共稼ぎである。私は昭和十五年生まれであるから、昭和十七年、八年頃であろうか近所の年上の方達と保育所に通っていたのをうっすらと憶えている。戦争の真ただ中であつたので、大きい者から順に列をなして通っていた。

過日大同窓会で神社のお参りを

させてもらった。その時の先輩方が、

ここに保育所があり懐かしいと

言われていたので、初めて私が通っ

ていた場所を知ることが出来た。

そう想えば幼い私が神社の階段

で遊んでいる姿が見えそうであつ

た。その後火災により私は昭和二十

二年に札久留小学校へ入ることに

なつた。その当時十校位あつたのだ

ろうか、殆ど交流がなかつた。唯一

想い出すのが、中学三年の時、全町

弁論大会に出て「貧しき友よ希望を

持て」と言つて怒鳴つたのが懐かし

い。今浪曲をやっているが、何か通

じる所がありそうである。高校は紋

別へ通わせて貰つた。朝六時頃自転

車で滝上の駅まで行き、煙を上げる

汽車で約二時間かかり紋別駅に着

く。それから三十分位歩いてギリギ

リに学校に着く。帰りはその逆であ

るが、若いという事は凄いいもので

ある、あまり疲れたと思わなかつた。ただ勉強も部活もする暇はなかつ

た。

昭和三十四年に高校を卒業後、木

工所の社長宅に住み込み帳場とし

て働いた。当時滝上は風倒木景気が

落ち始めていたが、人口一万を越し

町議の過半数を木材屋が占めてい

た、工場も十件位あつた。若い私は

これから滝上が衰退することを予

測出来なかつた。だから一生滝上で

生活できるものだと思つていた。何

の不満も無かつたが、新しい世界に

あこがれが湧いてきて、お巡りさん

になると言つて親と古里を離れた。

親も古里を離れさせた。

両親は共に異郷の地で旅立つた。

特に父のメモの中には「滝上に帰り

たい。」と書かれていた。やっぱり

滝上が良かったのだと知りました。

両親のお骨は滝上のお寺に収め、私

が七十五歳に成るまで毎年滝上に

通つた。古里は親と一緒にあり、一

日も忘れる事が出来ないものであ

る。天気予報を見ている、滝上に豪

雪や猛暑があると事故が無いよう

にと祈つている。滝上の衰退を悲し

み、七面鳥やチーズを売り出してい

る元気な滝上を見ると嬉しくなる。

残っている人も大変でしょうが、

いつまでもいつまでも元気な滝上

を守つて欲しい。そして私たちが

喜びを知らせたい時や、悲しみを

訴えたい時も滝上を守っている皆

さんがやさしく迎えてくれるのが

いちばん嬉しいのです。私も今滝上

公園にあるお墓に眠りたいと思ひ

土地を求めましたが、お墓を守るこ

とができない事になり、涙を飲んで

親戚に譲りました。今はゴルフや川

柳等趣味を楽しんでいます。でも心は

ひと時も滝上を忘れる事は無い。い

つでも心は滝上に帰る事ができる

私です。

